

機関番号：10104

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520366

研究課題名（和文） 現地調査とデータベース作成によるアパール語の格配列と他動性に関する総合的研究

研究課題名（英文） Comprehensive study of case marking and transitivity in Avar

研究代表者

山田 久就（YAMADA HISANARI）

小樽商科大学・言語センター・准教授

研究者番号：60345246

研究成果の概要（和文）：

本研究ではアパール語の次のことに関して明らかにした。(1)それぞれの動詞の項（動詞の意味解釈上の必須要素）がどのような格で現れるのか、また、それぞれの動詞はどのような意味的な特徴を持っているのか。(2)どの動詞が自動詞として用いられ、どの動詞が他動詞として用いられ、どの動詞が自動詞としても他動詞としても用いられるのか。(3)使役動詞が四つあるが、この四つの使役動詞に埋め込まれている動詞の項はどのような格で現れるのか、また、この四つの使役動詞はどのような意味的な特徴を持っているのか。

研究成果の概要（英文）：

This study answered the following questions of Avar: (1) In what case do arguments of verbs appear and what semantic characteristics do verbs have? (2) Which verbs are used as intransitive verbs, as transitive verbs, or as either intransitive or transitive verbs? (3) There are four causative verbs. In what case do arguments of verbs embedded under the causative verbs appear and what semantic characteristics do the causative verbs have?

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：アパール語、コーカサス、統語論

1. 研究開始当初の背景

アパール語の動詞、形容詞の格配列に関してはいくつかの文献で記述されているが、全く十分とは言えない。申請者は「述語のタイプから見たアパール語の二項述語の格枠組み—接触動詞を中心に—」という論文で接触動詞などの格配列についてまとめていて、調査で集めたデータとそれまでの研究の成果を利用して、アパール語の動詞、形容詞の格配列についてさらなる調査を行い、研究をさらに発展させていくことを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ロシア連邦ダゲスタン共和国で主に話され、ダゲスタン諸語の一つであるアパール語の動詞、形容詞の格配列（動詞、形容詞が名詞と結びつく場合に名詞がどのような格になるのか）、それと関連する他動性（どのような動詞が自動詞としてあるいは他動詞として使われるのか）に関して、単語ごとの網羅的な調査によるデータベースの作成とアパール語内（標準語、方言）での比

較および他言語との比較を通して、記述言語学、理論言語学、社会言語学的な観点から明らかにすることである。

3. 研究の方法

これまでの研究で電子化し、必要に応じていろいろな文法事項の注釈をXML形式で入れているアバール語のテキストを改良しながらPerlやJavaによる自作のプログラムを用いて分析するとともに母語話者に対して質問形式の調査を行い、両者を有機的に結びつけながら、単語ごとのデータベースを作成し、文献等から他言語の関連する情報を集め、アバール語と他言語の共通点と相違点に着目しながら、研究を行った。

4. 研究成果

論文で発表した研究成果をまとめると次のようになる。

(1)

論文『アバール語における衝撃を伴う接触動詞について』では接触することによってある程度の衝撃を与えること表す接触動詞 k' abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」、AM-uxize「何度かたたく」の基本的な用法における格枠組みなどの統語的な特徴、基本的な用法における意味、派生的、比喩的な用法について論じている。いろいろな言語で意味的に対応する単語には、統語的な振る舞いが似ているか似ていないかに関係なく、それぞれの単語が含んでいる意味の範囲や用法などによりかなり違いがあることも多いので、言語間のより深い比較を行う場合、それぞれの単語の意味、用法、特徴に関してある程度深く知っていることが必要になる。ここでの接触動詞とは、接触するもの、接触する場所、接触するものを動かしている動作主の三つの関係を表しているが、動作主と接触する場所を項とし、接触するものを項としない二項動詞を意味する。「接触する場所」という語は抽象的な意味で用いていて、体の一部やその主である人間や動物であることもある。

アバール語のいろいろな接触動詞が持つ格枠組みには次のようなものがある。

	動作者	接触する場所	接触するもの
(a)	能格	位格	絶対格
(b)	能格	位格	能格
(c)	能格	絶対格	能格
(d)	絶対格	位格	能格

最も基本的な用法において、k' abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」は(a)のパターンで使われるが、AM-uxize「何度かたたく」は(c)のパターンで使われる。テキストにおける使用例は少ないが k'ut'ize「軽くたたく」は(b)のパターンで使われることもある。k' abize「たたく」は「楽器をたたく」場合には(c)のパターンで使われることがある。k' abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」に移動先を表す向格の名詞あるいは副詞が付いて、「たたいて～を～に移動させる」、「押して～を～に移動させる」ということを表すことがあるが、この場合は、(c)のパターンで使われる。

k' abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」には便宜的に「たたく」という訳をつけているが、日本語の「ける」などにも対応し、接触するものは体の一部(手、足、頭など)あるいは体の一部に接触しているもの(手で握っている棒など)なら何でもよい。接触するものが「剣」、「ナイフ」のように刃の鋭いものである場合、日本語の「たたく」だと刃でない部分を何かに当てることを意味するが、アバール語の k' abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」は切るために刃の部分は何かに当てることを普通は意味する。また、k' abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」は接触するものとして「むち」や「ひも」のようなやわらかいものを取り取することもできる。AM-uxize「何度かたたく」は接触するものとして「剣」、「ナイフ」のように刃の鋭いものを取り取ることができない。体の一部あるいは体の一部に接触しているものなら何でも接触するものとして選ぶことができる。「むち」や「ひも」のようなやわらかいものでもよい。tunkize「突く、押す」も接触するものは体の一部あるいは体の一部に接触しているものなら何でもよい。ただ、tunkize「突く、押す」で接触するものとして「むち」を使うと、硬い柄の部分当てることを意味する。「棒」や「剣」、「ナイフ」をある対象に向かってまっすぐ直線的に動かす場合は k' abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、AM-uxize「何度かたたく」は使えず、「棒」なら tunkize「突く、押す」を使い、「剣」、「ナイフ」なら tunkize「突く、押す」あるいは x'unsize/x'unchize「刺す」を使う必要がある。「手」、「こぶし」、「足」などは、ある対象に向かってまっすぐ直線的に動かす場合でも k' abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、AM-uxize「何度かたたく」を使うことができる。もちろん、tunkize「突く、押す」を使うこともできる。k' abize「たたく」と k'ut'ize「軽くたたく」は意味的に近いが、何らかのダメージを与えようとする場合には k' abize「たたく」が使われる。

k'ut'ize「軽くたたく」はドアをノックするような状況や後ろから肩とポンとたたいて存在を知らせるような状況でよく使われる。このような状況ではk' abize「たたく」は使われない。

k' abize, k'ut'ize, tunkize は自動詞としても使われる。自動詞として用いられた場合、「当たる」、「ぶつかる」の意味になり、接触するものと接触する場所だけが問題となり、接触するものは絶対格で、接触する場所は位格で現れる。他動詞として使われた場合は絶対格で現れる接触するものは項ではないが、自動詞として使われた場合には、絶対格で現れる接触するものは項である。他動詞として使った場合、接触するものは体の一部あるいは体の一部に接触しているものに限定されるが、自動詞として使った場合は、接触するものは体の一部あるいは体の一部に接触しているものであることもあれば、それ以外の場合もある。日本語の「ぶつかる」に意味的に対応するアバール語の動詞は第一に tunkize であり、絶対格で現れる接触するものにはいろいろなものを使うことができる。

tunkize の代わりに k' abize を用いて、人間などがぶつかることを表すこともできるが、使用頻度はかなり低い。tunkize の場合より k' abize を使ったほうが「強くぶつかる」ことを表す。一方、誰かが投げた石が何かにぶつかった場合などは、tunkize や k' abize を使って表現することはできない。k' abize, tunkize と違って、k'ut'ize は人間などが何かにぶつかることを表すことはできないし、誰かが投げた石が何かにぶつかることも表すことはできない。

k' abize「たたく」、k'ut'ize「軽くたたく」、tunkize「突く、押す」は派生的、比喩的な用法を多く持っている。たとえば、k' abize が「鐘」、「ベル」を絶対格で取ると、「鐘やベルを鳴らす」という意味になるし、k' abize が「水」、「血」を絶対格で取り、さらに移動先を表す名詞あるいは副詞を取ると「水、血を～に送る」という意味になる。この他にいろいろな比喩的な用法がある。

(2) 論文『アバール語における動詞の結合価』では、アバール語の動詞の格枠組みと他動性に関して次のことを論じている。

①アバール語の動詞を項の数とそれぞれの項が取る格に基づいて分類した場合、ごく少数の例外的な動詞を除くと五つの主要なタイプに分類することができる。一項自動詞、二項他動詞、二項自動詞、斜格動詞、三項他動詞である。一項自動詞は絶対格の項だけを取る動詞であり、二項他動詞は能格と絶対格の項を取る動詞である。二項自動詞は絶対格と斜格の項を取る動詞である。ただし、斜格

動詞も絶対格と斜格の項を取る二項動詞なのでこれ以外の動詞となる。斜格動詞とは二項動詞であるが経験者あるいはそれに類する意味役割が斜格で現れ、もう一つの項が絶対格で現れる動詞である。三項他動詞は能格と絶対格と斜格の項を取る動詞である。二項動詞のほとんどは二項他動詞であるが、多少二項自動詞があり、たとえば、第一位格を取る bozhize「信じる」、gurx'ize「あわれむ」、baraxshshize「もったいながる、けちる、あわれむ」、第一向格あるいは第一位格を取る、AM-ag'ize「しがる」、semize「責める」、第二位格を取る g'ennekkize「聞く、耳を向ける」、ch'alg'ine「恋しがる」、inag'dize「思いこがれる」、第二位格か第一向格を取る balag'ize/AM-alag'ize「見る、目を向ける」などである。斜格動詞は、下位区分として、経験者が第一位格で現れる第一位格動詞と経験者が与格で現れる与格動詞がある。第一位格動詞は l'aze「知る」、AM-ix'ize「見る、見える」、rag'ize「聞く、聞こえる」、AM-ich'ch'ize「わかる」などであり、与格動詞は AM-ok'ize「好く、好いている、欲する」、k' warig'ine「必要である」などである。rixine「嫌う」は第一位格動詞としても、与格動詞としても使われる。少し変わった動詞があり、bazarize「できる」は経験者を第一位格、第二奪格、第二経路格で標示することのある動詞である。二項動詞には上述の主要なタイプには属さない例外的なタイプの動詞があり、能格は取るが絶対格は取らない二項動詞が存在する。zink'ize「つねる」、gildize「くすぐる」、baize「キスする」は能格と位格を取る動詞であり、x'amize「ののしる」は能格と第一向格あるいは第一位格を取る動詞である。bajbix'ize は他動詞として「～が～を始める」という意味で使われるが、その他に、能格と第一向格を取り「～が～に着手する」というような意味で使われる。また、他動詞として使われる動詞に文脈のない状況でも 0 (絶対格) を省略することができる動詞がいくつかある。たとえば、puze は「(息を) 吹く」、「(笛などを) 吹く」というような意味で他動詞として用いられるが、0 (絶対格) が省略されている場合は、「息を吹く」という意味になる。

②アバール語には自動詞としても他動詞としても使われる動詞が多い。一つ目のタイプは、「壊れる」と「壊す」のようにある変化を表す自動詞とそれに行為者を加えた他動詞のペアであり、このようなペアはアバール語では一つの動詞で表し、別々の動詞を使うことはないといってよい。自動詞としてだけ使える動詞もあり、その場合は使役動詞を使い、行為者を加えるが、ある動詞が自動詞としてだけ使えるか、自動詞としても他動詞としても使えるかには結構な揺れが見られる。

自動詞としても他動詞としても使える二つ目のタイプは、kwanaze「(他)～を食べる、(自)何かを食べる」、x^haze「(他)(ゲームやスポーツを)する、(役を)演じる、(自)何らかのゲームあるいはスポーツをする、何らかの役を演じる」、urg^hize「(自)考える(他)(～を)考えつく」などのタイプで数は少ないが存在する。

③アパール語には受動態も逆受動態もないが、逆受動的な振る舞いを持ったものに基本となる動詞から派生する持続動詞と呼ばれる一連の動詞がある。基本動詞から持続動詞を作る方法はいくつかありどのような方法で持続動詞が作られるかは音韻的な特徴などで多少の傾向はあるが、基本的にはそれぞれの単語に依存していて、方言間でかなりの違いがあるし、標準語内でも方言に由来する地域差などの理由から持続動詞が複数個並存していることもある。持続動詞は「しばらくの間／繰り返し／習慣として何かをする」ということを意味し、持続動詞は自動詞からも他動詞からも作られる。ただし、全ての動詞から持続動詞を作ることができるわけではなく、対応する持続動詞を持たない動詞はかなり多い。持続動詞は常に自動詞であり、他動詞から持続動詞を作る場合には基本となる他動詞のA(能格)が持続動詞でS(絶対格)になる。基本となる他動詞のO(絶対格)に対応する要素は持続動詞では現れることができないのであるが、例外として、sunt^hize「におう」から作られた sent^heze、xapize「つかむ」から作られた xapeze/xapdeze、ch^hik^hize「なめる」から作られた ch^hik^harize などでは基本となる他動詞のO(絶対格)に対応する要素を位格や向格で表すことがある。他動詞から持続動詞が作られる場合に基本動詞のOに対応する要素は常に「何かを」を意味するわけではなく、特定のものに限定されることも多い。また、自動詞から作られる場合でも他動詞から作られる場合でも基本となる動詞と持続動詞で意味が比喩的に変わってしまうこともある。

④使役動詞には、一般的な使役動詞と言える g^ha-AM-ize、強制使役の t^hamize、許容使役の teze および AM-ichchaze がある。どれも、使役専用の動詞ではない。g^ha-AM-ize では、埋め込まれている動詞のSは絶対格で、Aは第一位格で、Oは絶対格で現れる。t^hamize では、SもAもOも絶対格で現れる。teze と AM-ichchaze では、Sは絶対格で現れ、Oは絶対格で現れるが、Aは能格で現れることが圧倒的に多いが、他のいろいろな格で現れることもある。teze では、Aが能格以外では第一位格で現れることが少なからずあり、また、与格、第二向格、絶対格で現れている例もある。AM-ichchaze ではAが能格以外では第一

位格、与格、第二向格、絶対格で現れている例もある。t^hamize は人に何かを行うことを強要することを意味するので、埋め込まれる動詞はその動詞のSあるいはAが意図的に引き起こすことができる動きを表していることが圧倒的に多いが、g^hodize「泣く」などの非意図的に行うことが多い動詞が t^hamize に埋め込まれている使用もある。このような場合、命令して泣く行為を行わせたりするというような意味ではなく、泣くような状況を作り上げるというような意味で使われている。teze を使った許容使役と AM-ichchaze を使った許容使役は基本的には意味に違いがないが、埋め込まれる動詞によっては片一方と結びつきやすいという傾向はある。

⑤AM-ekize は「割れる」と「割る」という意味を持っていて、自動詞としても他動詞としても用いられるが、「割れる」を表すには AM-ekize を単独で用いる他、使役動詞 g^ha-AM-ize に埋め込んで表すことがある。多くの動詞はこのような状況にあるが、使役の意味を表すのに、動詞を単独で用いるか使役動詞に埋め込むかは動詞間で頻度にかなりな違いがある。

⑥アパール語では、進行相は動詞の形容詞的分詞現在形(あるいは未来形)と存在動詞 AM-uk^hine「いる、ある」を組み合わせ、結果相は副詞的分詞過去形と存在動詞 AM-uk^hine「いる、ある」を組み合わせ複合的に作られる。進行相と結果相は基本相(無標の相)と格の分布において違った振る舞いを見せる。基本相では他動詞のA(主語)は必ず能格で現れるが、進行相ではAが能格で現れたり、絶対格で現れたりする。どちらの場合も他動詞のO(直接目的語)は絶対格になる。進行相においてAを能格で標示している文とAを絶対格で標示している文の割合は9:1ぐらいである。結果相ではAが能格で現れるのが大多数であるが、絶対格で現れることもある。どちらの場合も他動詞のOは絶対格になる。結果相でAが絶対格で標示されることはかなり少ないのであるが、テキストに150例ほどある。結果相では自動詞においても基本相と違った振る舞いをする。「Musaの心臓が病んでいる」を「Musaが心臓が病んでいる」にするような感じで、普通は自動詞のS(主語)を修飾している属格名詞が絶対格で標示され、自動詞のSと自動詞のSの所有者が共に絶対格で標示されることがある。こうした使用例はかなり少ないのであるが、テキストに75例ほどある。

⑥AM-ekize「割れる、割る」は自動詞としても他動詞としても使われる動詞であるが、動作主を第二奪格で標示して、「誤って割る」というような動作主の非意図的な関与を表すことがある。先行文献にこうした動詞の例として AM-ekize「割れる、割る」の他に

AM-ortize「落ちる」、AM-orch^hize「出る」、AM-ilize「なくなる」が挙げられているが、AM-ekize「割れる、割る」以外は自動詞としてしか使われない動詞である。自動詞としても他動詞としても使われる動詞あるいは他動詞としてだけ使われる動詞でこのような使い方ができるのは筆者が調べたところではAM-ekizeしかない。また、AM-ekizeのこのような使い方の使用頻度も極めて少ない。

(3)

『アバール語における場所格交替動詞について』では、アバール語にどのような場所格交替動詞(spray/load動詞、wipe動詞、clear動詞)があるのかについて論じている。ある事態をある動詞を用いて表現する場合、その事態への複数の関与者を名詞の格、名詞に伴う前置詞/後置詞など(以下、まとめて形態統語的標示と呼ぶ)を用いることによって区別して表現することができるが、どの関与者をどの形態統語的標示で表現するかで、特に、どの関与者を0(他動詞の直接目的語)にするかで複数のパターンを持っている動詞がある。このような動詞の代表格は場所格交替動詞であり、場所格交替動詞は下位分類することができるが、spray/load動詞、wipe動詞、clear動詞を問題にしている。英語のsprayやloadに代表されるspray/load動詞は、単純に言うと、ある側面から見るとある対象物のある場所への移動を引き起こすことを表していると思えることができ、別の側面から見るとある対象物の移動先にあたるあるものをなんらかの形で変化させること、あるいは、それに対して変化を伴わない働きかけを行うことを表していると思えるような動詞であり、一つのパターンでは移動対象を0に選び、別のパターンでは対象物が移動していく場所(以下、移動先と呼ぶ)を0に選ぶことができる動詞である。英語のclearに代表されるclear動詞と英語のwipeに代表されるwipe動詞は、spray/load動詞とは反対に、ある側面から見るとどこかにある何かをそこから移動することを意味する動詞で、移動対象を0にするパターンと移動元を0にするパターンを持った動詞がある。移動元が0になっている場合に移動対象を表すことができる動詞がclear動詞であり、移動対象を表すことができない動詞がwipe動詞である。

アバール語にはspray/load動詞はとてども少ないが、AM-ox^hize「塗る」、zhuzhaze「塗る」はspray/load動詞である。AM-ox^hize「塗る」は家を作ったり、修理したりするときに家や壁などの家の一部に何か(粘土、塗料など)を塗る場合に主に使われる。zhuzhaze「塗る」は塗る範囲が少し広いというようなニュアンスを持っている。AM-ox^h

ize「塗る」、zhuzhaze「塗る」では、移動対象が0である場合、移動先は位格で表され、移動先が0である場合、移動対象は能格で表される。しかし、移動対象が0になっていることが圧倒的に多い。アバール語で「塗る」ことを表すにはほとんどの場合AM-axine「塗る」が用いられるが、移動する対象が必ず0になり、移動先は位格で表される。1^h ul^h aze「こする」、AM-asine「模様などをつける」も意味的には周辺的であるが、spray/load動詞の一種であり、移動先は位格で表され、移動先が0である場合、移動対象は能格で表される。zhemize「巻く、くるむ」もspray/load動詞の一種であり、移動対象が0である場合、移動先は位格で表されるが、移動先が0である場合、移動対象は第三位格で表されるのが普通である。テキストの実例はないが、インフォーマントによると移動対象を能格で表すことも可能である。英語のsprayに意味が近い動詞はpunx^h ize「噴霧する、スプレーする」であるが、移動対象を0にして、移動先を向格で表現することはできるが、移動先を0にすることはできない。英語のloadのように「～を～に運び込む」というようなことを表現したい場合には、1^h eze「置く」を使う。この動詞はあるものをある場所に置くことを表す最も一般的な動詞であり、移動対象を0にして、移動先を位格で表すことはできるが、移動先を0にすることはできない。アバール語には「詰める」や「満たす」を表す動詞はts^h ezeしかなく、移動先が必ず0となる。

アバール語でclear動詞に分類することができるのはAM-ats^h ts^h ine「きれいにする」だけである。移動対象が0になっている場合、移動元は奪格で表される。英語のclear動詞では移動元が0になっている場合、移動対象は前置詞ofで表されるのに対して、アバール語のAM-ats^h ts^h ine「きれいにする」では移動元が0になっている場合、移動対象は第一奪格で表される。

wipe動詞はアバール語にいくらかあり、churize「洗う」、ch^h ex^h eze「出す、空にする」、k^h k^h waze「(毛を) 剃る」、k^h unts^h ize「(毛などを) 刈る、はさみで切る」、x^h ulize「(毛を) 抜く」、AM-etsize「刈る」、1^h il^h ize「刈る」、ch^h araze「(雑草などを) 抜く」、chchuk^h ize「(動物の皮を) はぐ、(人間や動物の体に付けている物を) はずす」がwipe動詞である。移動対象が0になっている場合、移動元は奪格で表されるが、移動元が0になっている場合、移動対象を表すことはできない。churize「洗う」では移動元が0になっていることがほとんどであり、ch^h ex^h eze「出す、空にする」も移動元が0になっていることが多い。AM-etsize「刈る」、1^h il^h ize「刈る」、ch^h araze「(雑草などを) 抜く」

で移動対象が0になっている場合、移動元は「畑」などであるが、「畑」などは移動元としてではなく、作業の場所として位格で表されることが多い。chchuk^hize「(動物の皮を)はぐ、(人間や動物の体に付けている物を)はずす」は移動元が動物で移動対象が皮などであるような場合、二つのパターンで使われるが、移動対象が0になっている場合、「牛から皮をはぐ」というような表現よりは、「牛の皮をはぐ」というような表現がよくなされ、移動元を表す名詞は移動対象を表す名詞の属格であらわれ、移動元は表現されないことが多い。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①山田久就、アバール語における場所格交替動詞について、人文研究、査読無、121巻、2011、161-179

②山田久就、アバール語における動詞の結合価、アジア・アフリカの言語と言語学、査読有、4巻、2009、85-109

③山田久就、アバール語における衝撃を伴う接触動詞について、人文研究、査読無、117巻、2009、109-130

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 久就 (YAMADA HISANARI)

小樽商科大学・言語センター・准教授

研究者番号：60345246